



共生の時代

'08
12月

●発行:グリーンコープ共同体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



「アジア民衆福岡寄り合い」
国際会議
Asian People's Gathering in Fukuoka

「南と北の共生」の

さらなる具体化へ

「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備大会開催

ネグロスとの民衆交易から約20年、その貴重な経験の蓄積を糧とした「互恵のためのアジア民衆基金」を立ち上げるため、「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議(11/8・9)が開催されました。その報告集会が2008年11月11日、福岡国際会議場で開かれました。

韓国の生協運動にもかかわりの深い金芝河詩人による記念講演とネグロスのはじめ、フィリピン北部ルソン・インドネシア・東ティモール・パレスチナ・パキスタンなど、民衆交易や支援活動をおして連帯している国からの報告がありました。参加各国の「基金」に寄せる思いが参加者1100人の心に響き、会場は温かな感動に包まれました。



韓国 金芝河 詩人

冒頭、グリーンコープ共同体代表理事吉田文子さんから、11月8・9日開催された「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議を踏まえての挨拶がありました。

「国際会議で発足準備が確認された『互恵のためのアジア民衆基金』を三つの観点からお話します。一つは、北が南に介入するのではなく、南は南のままで、南として豊かになる。そのような南に助けられて北は真の豊かさを取り戻し、共に豊かになっていく。そのための基金であるということ。二つ目は、20年前飢餓に苦しむネグロスに出会い、ネグロスを支援するために始めたバナナやマスコパド糖の民衆交易に、困難を乗り越えながら取り組んだ先輩組合員に感謝したい。その南との共生の継続が今日を迎える礎となった。三つ目はここに集まっている組合員が今日の感動を各地の多くの組合員に語りつないでいく人々たちであるということ。民衆交易の商品の利用で、南の人々のいのちと繋がることができる。そんなグリーンコープ

を誇りに思います」。

新しい時代の「市場」へ

続いて、韓国の思想家でもある金芝河詩人の講演がありました。テーマは「互恵(互恵)を全面に、交換を日常に、再分配を準備して」。朝鮮の哲学者である金一夫の著書「正易(易哲学・易科学での考えから)」や経済学者カール・ポランニーの「大転換―市場社会の形成と崩壊」などを基にした論考を、本人自ら「難解な点もある」とジョークを交えながら話しました。

「アメリカを中心とした市場の景気の停滞と極端なカジノ資本主義(ギャンブル的投機)の破綻が、世界的経済転換の背景となっている。『正易』でもこのような時代が来るのが、すでに語られている。このカオス(混沌)の時代にも、カオスとしての秩序が生まれる。それは、西洋経済のように、無機的で権力的な市場ではなく、これまで弱者であった人々、学生を含めた若者たちや女たちや孤独な大衆が主人公の、古代の市場とも言える市場である。それは新しい時代を切り開くアジア的価値観の市

場である」。

「世界的な金融危機の中『互恵のためのアジア基金』は『互恵(互恵)』を全面に、交換を日常に、再分配を準備して」の具体的な第一歩である」と「互恵のためのアジア民衆基金」へのメッセージが送られました。

次いで、海外から参加している各NGOから、取り組みのようすや、「アジア民衆基金」に寄せる期待が述べられました。最後に、「基金」の呼びかけ人団体である韓国のドゥレ生協連合会の参加者から、連帯の心を込めて「世界に一つだけの花」などの歌が披露され、会場と一体となりました。

国際会議のまとめとして、APLA/あぶらの共同代表秋山眞兄さんから「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備委員会立ち上げについての、報告とアピールがありました。

「互恵のためのアジア民衆基金」は、2009年10月設立をめざし、設立準備委員会が具体的な準備がすすめられていくことになっています。

6・7面に関連記事掲載

Contents

グリーンコープを創った人たち(9) グリーンコープ連合商品委員長 篠原 晴美	
牛乳と共にグリーンコープを駆け抜けた	2
メーカー・生産者からのメッセージ(9) ハケタ会	
安心・安全なりんごを求めて 30年共に歩んできた	3
from ネグロスクリスマスキャンペーン ネグロスとの連帯20年...そしてアジアへ!	4
コーヒーは生きる糧 〜長い支配と抑圧から真の自立をめざす 東ティモールの人々をグリーンコープは応援します〜	5
「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議 ネグロスの連帯を礎に アジアの国々の相互連帯をめざす	6・7
セーフティネット貸付実現全国会議主催・北九州シンポジウム セーフティネット貸付の実現に向けて	8
グリーンコープ生協(長崎)20周年記念講演会 いのちの感受性 落合恵子さん	9
安心・安全な豚肉を安定して食べ続けるために 産直豚肉の価格を改定しました	10
グリーンコープ生協おおさか産直豚肉講習会 産直豚肉のこだわり、おいしさを知ろう	
グリーンコープがめざす生活協同組合®	11
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ 未来へつなぐ20年 私の思い	12

20年の歴史を創った原点に戻る



「びん牛乳」はグリーンコープの食べ物の運動の象徴ともいえる商品。その30年にも及ぶ開発の歴史はグリーンコープの歴史と共にある。熊本県益城郡に暮らす篠原晴美は牛乳生産地に近いという地の利を生かし、共生社連合(グリーンコープの前身生協)の商品担当理事室(組合員事務局)としてノンホモ・パスチャライズ牛乳開発の先頭に立ってきた。1980年代のことだ。その後、単協商品副委員長を経て連合商品委員長へと歩をすすめた。



グリーンコープ連合商品委員長
篠原 晴美

牛乳と共にグリーンコープを駆け抜けた

篠 原が共生社生協くまもとに加入したのは1980年、32歳の時だった。

氾濫する食品添加物には不安を覚えていた。そこで、勧誘されてすぐに組合員になり班を結成した。生協は100%安全な商品を提供しているという。ところが、80年代初めはまだ不十分で段階で、商品も充実しておらず、課題は無限にあった。

牛乳もその一つだった。特筆すべきは、その頃すでに共生社では殺菌温度を90℃15秒に落とす試みをはじめていたことだ。それだけでも大変な進化だった、という。その理由は、次の理由による。そもそも牛乳を飲むという習慣を持たない日本で、戦後急速に広まった牛乳の主流は加工乳だった。1971年に起きた「ヤシ油混入事件」は、その加工乳がどのようなものかを消費者に明快に教えてくれた。その乳業メーカーは牛乳の乳脂肪を抜いて代わりにヤシ油を入れたのだ。その事件によって、「牛乳の脂肪分は乳脂肪でなくてはならない」との乳等省令が初めて改められたのだ。

「子どもたちにそのようなものを飲ませるわけにはいかない」。グリーンコープ結成前の生協はどこも弱小というほかに規模が小さく、それでもまず成分調整牛乳を何とかお願いして作ってもらおうと、ここから動きはじめた。応えてくれ

る乳業メーカーがあった。

次の段階が殺菌温度。篠原が組合員になったのは丁度その頃だ。全国的にも本物の牛乳を模索する消費者運動が起きていた。

めざすは ノンホモ・パスチャライズ

加入した翌年篠原は、商品委員になり、さらにその翌年には商品委員長になる。持ち前の旺盛な好奇心で牛乳の開発に夢中になった。84年には共生社を代表して酪農先進国であるヨーロッパ(ドイツ、スイス)を視察した。数千年の酪農文化を持つこうした国では、飲用は生乳もしくはパスチャライズ殺菌(ノンホモ)で、料理用や遠隔地用にはUHTと使い分けられていた。滞在した民宿の女主人は毎朝ゲストと自分たちのために隣の牧場まで生乳を買いに行き、飼育猫にももつぱらバック入りのノンホモ・パスチャライズ牛乳を与えていた。

それが当たり前だった。鮮烈な体験だった。この視察で篠原は牛乳という「食べもの」を正確に理解する。一番良い牛乳とは生乳。ならば高温多湿の九州でめざすは生乳に一番近い牛乳、「ノンホモ・パスチャライズ」だ。だが、それはメーカーにも生産者にも「寝耳に水」に近いような話だった。

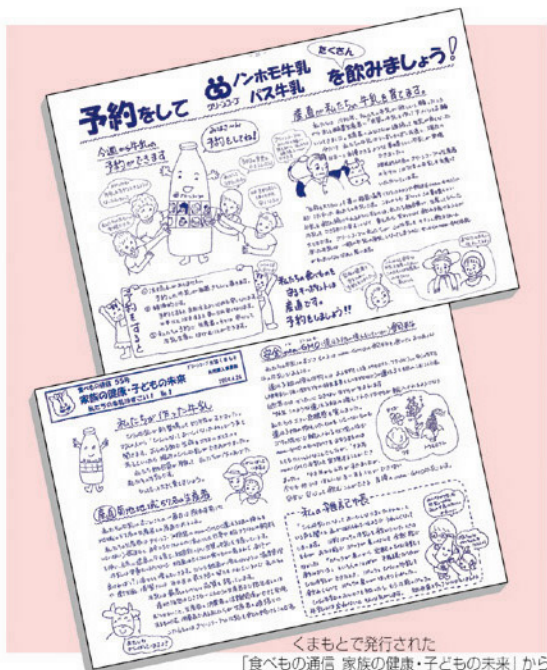
開発は苦戦する。生産地へタオルを贈る運動や交流などに取り組み、72℃15秒殺菌はようやく実現する。デリケートなクリームライズを持つノンホモ牛乳開発はさらに困難を極めたが、1987年それもメーカーの試行錯誤の末、実を結んだ。6年にも及ぶ開発物語の中でいつしか生産者もメーカーも組合員も同じくする食べものの運動仲間になっていた。篠原はこの時ほど嬉しかったことはない。

牛乳と篠原の濃いかかわり

グリーンコープブランドへの道

90年、篠原はグリーンコープ連合商品委員長になる。88年のグリーンコープ結成以来、「ちくれん」と「共生社」が開発した商品は統一の方向性にはあったが、遅々としたものだった。それぞれが開発した商品とはそれぞれ生き方、思想というべきものだったからだ。自分たちの思いのこもった商品を否定されることは、人格を否定されたように思え、時には涙がこぼれた。

考え方の違いを化粧品を例にとると、共生社、ちくれんとも化粧品が肌には異物であることについては一致していた。だがちくれんは「異物なら取り扱うべきでない」と考え、共生社は「化粧品はするのだから少しでも肌に負担をかけないものを開発すべきと考えた。矛盾を内に抱えるか、外に抱えるかの違いだが、それは決定的だった。結局、「化粧品のかえ方」についてまず話しあい、グリーン



くまもとで発行された「食べもの通信 家族の健康・子どもの未来」から

コープの化粧品は開発された。この頃、同様にいくつかの商品の「かえ方」がていねいに検討され、やがてグリーンコープを冠した商品が次々誕生していった。4年間委員長としてその開発の現場にいた篠原にはそれらグリーンコープ商品がわが子のように可愛く思えた。そのようにして蓄えた知識を表現する才能も篠原は長けている。発掘したのはグリーンコープ生協おおいの商品部長(当時)の石三公予。篠原が夫の転勤に伴って97年に大分に移ったとき声をかけてきた。石三から「あなたならできる」と言われて篠原は3年半、商品情報を発信し続けた。手書き文字、組合員の目録で表現されたチラシはおおいたで大ウケした。熊本に再び帰ってからはくまもとでも同様の手書きの商品情報を2年間発行し続けた。時には親の看護の枕元で書くということもあったが、苦にならなかった。

一組合員に戻った現在の篠原は、民生委員などの地域活動にどっぷりはまり込んでいる。一方、暇を見つけては自宅からそれほど遠くない南阿蘇に通う。野の草花の写真を撮り感想を添えて写真集も作った。自然観察指導員の資格も持つ。手話もこなす。多才だ。四半世紀の間グリーンコープを縦横無尽に駆け回った後も、篠原はなお新しい扉をノックし続けている。その扉が見えることも篠原の多才の一つにあげられる。

※「120℃・2秒殺菌」など超高温で処理された牛乳(日本の牛乳の約95%がUHT牛乳、専門用語で「Ultra High Temperature」の略)

共に歩んだ20年



ハケタ会

安心・安全なりんごを求めて 30年共に歩んできた



ハケタ会りんご生産者のみなさん
(後列左から3人目が小滝さん 2005年取材時に撮影)



ハケタ会会長・丸山慶一さん

グリーンコップはこれまで、関係する多くのメーカー・生産者との信頼をベースに食べものの安心・安全を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から共に歩んできたメーカー・生産者をおして見えるグリーンコップを紹介します。

第9回は、長野県の産直りんご生産者グループ「ハケタ会」。1978年ちくれん(グリーンコップの前身の生協連合)との取り引きがはじまって以来30年間、安心・安全でおいしいりんごを作り続けています。そのりんごは「予約りんご」として、古くから組合員に愛されてきました。

現会長の丸山慶一さんをはじめ、当時を知る生産者らの話を聞きました。



「ハケタ会」は1972年に30歳代の農業青年らが地元の銀行の融資を受けながら立ち上げた生産者組織だ。その成り立ちを辿れば、時代背景が浮かびあがる。高度経済成長のピークを過ぎ、第一次オイルショックによって低成長時代に突入していく頃だ。さまざまな公害が白日のもとに晒され問題となった。また日本各地に地域生協が誕生していった時代でもあった。農業に何らかの意味を見い出したいと滴を持して船出した「ハケタ会」。名称には8桁にも及ぶ売り上げをめざしたい、という思いを託した。「八」には「末広がり」未来に向って広がるという意味を込めた。

気鋭溢れる青年らは、新しい形の農業をめざして研究会を立ち上げる。りんごに限定せず、花卉栽培の研究のために先進地である千葉県などを見て歩いた。その頃りんごの新品種「ふじ」が脚光を浴びつつあった。当時市場で出回っていた「国光」というりんごに比べて、「ジュシー」で味もいい。日持ちもする「ふじ」は魅力的だった。早速、ふじの栽培に取りかかる。

肥料のことを調べるために肥料会社へも足を運んだ。もちろん有機肥料を射程に入れてのことだ。

無袋ふじの栽培に未来をかけて臨む

猛然と、新品種のふじの栽培に向かった。「こんなに自信を持って作るからには、おいしく食べてくれる消費者に直接届けたい」と思ったと、同時に思いを馳せながら小滝さんは語る。りんご作りへの強い思いを抱いて販路を探った結果、大阪の生協との取り引きがはじまった。「消費者と話がしたい」と、出会った組合員に、りんごというくだものに對してどのようなイメージを持っているかを尋ねた。「日が経つと軟らかくなってまずい」「病気の時くらいにしか食べない」など、当時の国光に對するものであれ、にべもない回答に愕然とした。しかし、直接消費者の言葉が聞ける関係は、生産者のさらなる探究心を駆り立てたのだ。た。「本当のりんごの味を知らないから。おいしいふじを送って食べてもらいたかった」。

当時のふじの栽培は有袋が主流だった。袋をかけることによって色付きがよくなり、しかも病害虫の管理もしやすかったからだ。しかし、「本当のりんご」を模索していたハケタ会の若い生産者らは、もつとおいしいふじの栽培へと傾注していく。そして、有袋ではなく、無袋なら直接りんごが太陽の光を浴びて甘くなると、メンバーで知恵を出しあって無袋ふじの生産技術を確立していった。有袋ふじに比べると見た目はよくなく、おいしさが弾けてツル割れもするが、蜜の入った甘いりんごの栽培ができるようになったのだ。

こうした中、程なくして、関西生協連をとおして福岡市のちくれんと出会う。

さらなる追求は 減農薬りんご

ちくれんとの取り引きがはじまって2年ほどたった頃、「無農薬でりんごが作れないか」という申し入れがあったという。枝の剪定、花が咲き実を付けると摘果、その後の葉摘み、玉回し、そして収穫と、りんごの栽培は1年がかりだ。「農薬一つ減らすのさえない判断がいります。天候や気温に左右され、毎年何が起るかわからない。起こってしまうと何もかもが無くなってしまいます」。当時の生産者の正直な思いだった。しかし、「より安全なりんごを食べたい」と望む組合員さんの声には応えたい。話し合いを重ねて減農薬に取り組みことにしました。1990年に減農薬プロジェクトを発足、組織的に減農薬に取り組むはじめた。減農薬に挑戦はしたもの、りんごの木が傷んだり、収量も半減、味が落ちたりもした。また、組織としての軌みも出てきた。生協との取り引きの難しさに脱会するメンバーも少なくなかった。軌道に乗るまで紆余曲折が続く。一般の農薬使用に比べ、ハケタ会は半分はまだ減らすことができないようになった。りんご畑を覆う下草も除草剤は一切使わない。その作業は相当地に重労働だ。

産直りんごを食べよう！

こうした中、ハケタ会のりんごは次第に組合員に安定して利用されるようになっていった。また、最初はクレームになったこともあった蜜入りの甘いふじは、そのバツグンのおいしさに組合員の食指を揃えて離さなくなっていた。そうして年に一度待ちに待ったりんごを確実に手に入れたという組合員の思いと、集荷量の調整ができ生産に励みが出るという生産者のメリットが一つになって早期予約システムへとつながった。そのシステムはグリーンコップの食べものの「安心・安全・安定」に欠かせない取り組みの一つとなっている。しかし、予約をはじめ、通常のカatalogでのりんごの注文は減少気味だ。市場にいろいろな果物が登場しているからか、「りんご離れがすすんでいる」と会長の丸山さんは時勢を案じる。

今年は秋からの昼夜の寒暖の差によって、とりわけ甘くておいしいりんごが実った。ハケタ会のりんごを待ち続けている組合員の元へ真赤なふじが届く。



2008
from ネグロス
.....
クリスマス
キャンペーン

ネグロスとの連帯20年： そしてアジアへ！

グリーンコープの運動課題として取り組んできたネグロスとの連帯は20年を経過しました。ネグロスからはじまった連帯は、今では北部ルソン、東ティモール、インドネシアへと広がっています。

これまでの「ネグロス組合員ツアー」を「fromネグロス組合員ツアー」と名称を変更しました。新たな訪問先として「北部ルソン」を組み込んだツアーに、3人の組合員が参加しました。

ツアーから見えてきたネグロス、北部ルソンのようすと参加者の感想を紹介します。



「有機米は台風で倒れても起き上がる強さがある」と語る北部ルソンの生産者たち



ネグロスBGA事務所でNARBの人たちと交流するfromネグロス組合員ツアーの参加者。後列右から2人目が園田由紀子さん(グリーンコープ共同組織委員長)、3人目が山本睦子さん(グリーンコープ生協くまもと副理事長)、5人目が林真紀さん(グリーンコープ生協ふくおか副理事長)

砂糖 糖の国際価格の暴落で、飢餓に陥ったフィリピンネグロスの人々の緊急支援のために立ち上がった日本ネグロスキャンペーン(JCNC)。その呼びかけにグリーンコープもカンパの取り組みをはじめました。それから20余年、継続的に支援をしてきたグリーンコープはネグロスとの連帯を深め、「互いに学び、支えあう」関係をつくってきています。

農民として自立する砂糖労働者 日本とネグロスの連帯で育まれてきた20年によって、ネグロスは少しずつ変わってきました。長い期間、日銭を稼ぐ砂糖労働者だったネグロスの人々が、自らの土地を獲得し、農民として自分たちで食べる米や野菜をつくり、それを市場に出荷できるようになってきています。また、家族を基盤に農業経営を行うようになり、その中で女性の役割を見直し、女性が生計管理を主体的に担おうとしています。さらに女性を対象にしたワークショップの輪が広がっています。地域では共同して出荷す

fromネグロスを体感する

グリーンコープ共同組織委員長 園田 由紀子

福岡空港からマニラまで飛行時間約3時間余り、そこから国内線に乗り換えてバコロドまで1時間。日本との時差は1時間。そこがネグロスバナナの故郷です。

今回私たちはネグロスに4日間、そして組合員としては初めて北部ルソンへ3日間訪れました。

ネグロスBGA地域では、約10年前のバナナの病害後、収穫量は激減し、現在もほとんど回復できていませんでした。生産者のみなさんは努力を重ねていますが、まだ数年かかるようです。また、そのことをきっかけにバナナだけに頼る農業から、ナスやオクラ、イモ類などの栽培や、闘鶏(とても盛んで高く取り引きされるそうです)の飼育、養豚や養鶏に加え、魚の養殖など、農業の多様化に向けて、さまざまな試行がなされていました。

マスコバド糖工場は、昨年9月から操業を開始した最新鋭の機械を設置している工場を見学することができました。衛生管理も徹底されており、マスコバド糖の品質の向上に「納得！」です。

北部ルソンはマニラからさらに北へ国内線で1時間ほど。ここはネグロスのバナナが病害にあった時に日本へ向けてバナナを送り出してくれた地域です。8つの地域からなるCORDEVという組織のみなさんと交流しました。北部ルソンでは水田の風景が広がっていました。農地改革も早くからすすみ、行政との連携がうまく取れており、有機米の栽培なども含め農業の多様化への積極的な展開が自信を持ってなされていました。

CORDEVは今年3月、NGOから協同組合へと転身しています。そのことで、自分たちが人々を指導するという目線から、仲間としてネットワークをどう創っていくかという目線に変わることができ、やってよかった…と、自信を持って語っていました。

私たちは、今回の旅でたくさんの出会いと交流をとおり、ネグロスの人々とグリーンコープの20年にわたる歴史が創りあげてきたものを体感することができました。そして、これから育もうとしている未来…、ネグロスから北部ルソンへ、さらにインドネシア、東ティモールへと広がるネットワークに。今私たちがかわれることにワクワクとした昂揚感を感じました。



て共同出荷やまの消費者との連携をつくるなど、ネグロス版「地産地消」運動に取り組みはじめています。2ヵ月ごとに「寄り合い」を開催。常に40人近い農民が集まり、各自が抱える問題を共有化しあっています。最大の課題は「農家の資金繰り」。ネグロスでは公的機関による金融援助がほとんどありません。そのため農民同士の助けあいの中から生み出していく以外資金を得ることはできません。今後は農民互助会のような仕組みづくりが必要です。

産地として民衆交易に関係するようになりまし。パランゴンリニューアル計画の展開によって、2000年に正式なバナナの産地となりました。しかし、北部ルソンのバナナも台風被害や病害に悩まされ続けています。現在、バナナだけに頼らない農業を求め、有機米栽培や共同の堆肥生産を開始しています。そこで生産されたものをCORDEVが中心となり、マニラなどの消費地への国内流通をめざしています。

また。さらに、ネグロスの女性たちの「寄り合い」が北部ルソンや東ティモールの農民との交流へと広がっていくことになりました。グリーンコープはAPLAをとおして、ネグロスから広がるアジアの人々の自立支援に積極的に連帯していきます。

三つの農民組織が連帯 ネグロス各地に点在していた農民組織(NARB、ANOF、BGA)は日本や外国のNGOに支えられ、活動してきました。これらの組織はネットワークをつくり、NBAとして自立して相互に連帯するようになりました。それによっ

北部ルソンの農村共同 北部ルソンは1996年、ネグロスが台風被害を受けたことによるバナナの代替

連帯の輪が広がって ネグロスと北部ルソンの農民同士の交流がはじまり

NARB (ナガシ農地改革受益者組合) エスベランサの土地開墾で支援・連帯した地域の協同組合。砂糖労働者から農民への自立をすすめている。75家族で結成。ANOF (ネグロス有機農家連帯) 各地に点在している個人農家の集まり。JCNCが支援してきたPAP21運動から生まれた野菜農家約50家族で結成。BGA (パランゴンバナナ生産者協会) ATJが1991年に無農薬バナナの輸入をはじめた最初の産地。17村のバナナ生産者約700家族で組織している。NBA NARB、BGA、ANOF、Aのネグロスの農民ネットワーク団体。CORDEV (農村発展のための協同組合) ルソン島北部バナナ生産者を組織化し、2008年地産地消をめぐり協同組合に組織を再編

東ティモール
からの
メッセージ

コーヒーは生きる糧…

～長い支配と抑圧から真の自立をめざす

東ティモールの人々をグリーンコープは応援します～

東ティモールのコーヒーは山岳地帯に
シェードツリー（日陰樹）に守られて
栽培されている



収穫されたコーヒーチェリー
赤い実の中にコーヒー豆が入っている

頑張っている東ティモールの 人々を応援していきたい

グリーンコープ生協ふくおか理事長 田原 幸子

東ティモール視察をとおして、コーヒー生産者や東ティモールの女性と出会い・交流し、心が揺さぶられる体験をすることができました。そして、出会って知った私に何ができるか考えることになりました。

東ティモールの人々は長く植民地支配された歴史の中で、将来への夢や希望、自分たちの意志までも奪い取られていました。その中で、自分たちの国のことは自分たちで考え、決めていきたいと立ち上がりましたが、まだまだ混乱が続いていることを知りました。そのような状況を協同組合の理念で、支えあい助けあいの社会作りをめざして頑張っている人たちと出会いました。「誰もが安心して自分らしく地域の中で暮らしていける社会を作りたい」というグリーンコープの思いと同じだと感じました。そのように頑張っている人たちと共に歩んでいきたいと思いました。その社会作りをめざしていく基盤は“コーヒー”です。

見て体験したことを伝え、ロロサエコーヒーを飲む人を広げたいと思います。

ロロサエコーヒーは 東ティモールの人々の夢と希望

グリーンコープ共同体商品検討委員長 横 慶子

ロロサエコーヒーの故郷東ティモール。南半球にあるその国は、燦爛と降り注ぐ太陽の光が、やはり日本とは違っていました。ロロサエコーヒーをとおして見えてきた東ティモールが抱える現実、ロロサエ「太陽の昇るところ」という言葉に象徴されるような明るさは裏腹に、とても厳しく貧しい。標高1000m以上の山中、シェードツリーに見守られ育つコーヒーの木々。白い花が咲き、やがて赤い実となり、東ティモールの生産者の手から手へ…そして、日本で焙煎され私たちの手元に届くまで、どれだけ多くの人の手とエネルギーを要したことでしょう。ロロサエコーヒーには、東ティモールの人びとの夢と希望、そして自立へ向かうコーヒー生産者の大きな生命力がたくさん詰まっています。

ロロサエコーヒーを利用するという一人ひとりの小さなアクションが、国を越え海を越えて、大きく強い繋がりになり、お互いを補いあいながら共に豊かな未来へと歩いていけるのだと思います。

めロロサエコーヒーの取り扱いが、東ティモールとの民衆交易の一環として今年度カタログGREEN5号からはじまりました。それに先立ち、2006年に初めてグリーンコープ連合片岡専務が、2007年に商品部職員がコーヒー取り扱いの確認のために、東ティモールを訪問しました。

受けて、コーヒーの民衆交易の開始に伴い、組合員・事務局による産地視察を実施することになりました。9月27日～10月4日、グリーンコープ生協ふくおか理事長田原幸子さんとグリーンコープ共同体商品検討委員長横慶子さん、事務局2人が東ティモールを訪問し、現地のコーヒー生産者らと交流しました。

現在、多くのNGO組織による支援が活発に行われており、ATJ（オルター・トレード・ジャパン）による民衆交易事業もその一つです。グリーンコープはATJをとおして、東ティモールと共生・連帯し、東ティモールの自立を応援していくことを確認しています。グリーンコープ設立から20年間で育み培ってきたネグロスとの共生・連帯を契

機に東ティモールをはじめ、広くアジアの国々とのつながりを創り出していくこととなります。

コーヒー生産者による 協同組合作り

東ティモールのコーヒーは、ポルトガルによる植民地時代に持ち込まれました。それが今、東ティモールの唯一の輸出農産物となっており、人口の1/4

がコーヒーによって現金収入を得ています。コーヒーが栽培されているのは、1000m以上の山岳地帯です。山のいたるところにシェードツリー（日陰樹）が植えられており、その下にコーヒーの木が守られるように栽培されています。コーヒー生産者はとても貧しく、化学肥料や農薬を買えないことから、無農薬栽培の高品質のコーヒーが収穫

可能となっています。しかし、現在のようにより多くの国産企業によるコーヒー市場のグローバル化によって、品質より低価格が最優先されると、コーヒーは買い叩かれてしまうことになりそうです。めロロサエコーヒーの民衆交易は、東ティモールのコーヒー生産者に対する結びあつて創り出す国際連帯が、今後の東ティモールの自立への大きな力になるのではないかと確信できる訪問となりました。



コーヒー生産者の家に民泊をした朝、村の子どもたちに折り紙を教える田原理事長（右）と横委員長（左）



ATJのコーヒー加工場近くの子どもたち

成し、自主自立をめざそうと頑張っています。

夢を語りあい そして、自立に向かう

コーヒーの実の収穫・加工・脱穀・選別まで約3ヵ月を要します。コーヒー産業に従事する生産者はそこで得た収入だけで1年を暮らしているのが実情です。この貧困を克服していくために、コーヒーだけに頼らない複合農業の実践にも踏み出そうとしています。

東ティモールの人々の日常は、犬や猫、にわとり、そしてブタやヤギまでが人の生活に溶けあうように一緒に生きています。それはかつての日本の原風景を見ることが出来ます。その中で、貧しくても人々は夢を語りあえるようになりまし

た。東ティモールの民衆同士はもちろん、コーヒー生産者と日本の消費者が手を結びあつて創り出す国際連帯が、今後の東ティモールの自立への大きな力になるのではないかと確信できる訪問となりました。

連帯を礎にして の相互連帯をめざす

2008年11月8日～9日に開催された「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議には、グリーンコープがストッブ！GM（遺伝子組み換え）反対運動や六ヶ所再処理工場本格稼働反対運動など社会的な運動に連帯して取り組んでいる国内の団体や、民衆交易をとおして出会った海外の団体が多数参加しました。

世界恐慌が避けられないと言われる状況の中で生き抜くための英知として「互恵のためのアジア民衆基金」が提起され、その準備会立ち上げに向け、熱心な議論が展開されました。



グリーンコープ設立20周年という記念すべき年に福岡の地で「互恵のためのアジア民衆基金」設立に向けた検討が開始されることは意義深く、是非忘れない意見交換を期待します。国際会議の第一日は「互恵のためのアジア民衆基金」設立のための呼びかけ人を代表してグリーンコープ共同代表理事吉田文子さんの挨拶からはじまりました。

あいました。午後からは韓国・日本の参加団体から活動報告があり、それぞれが基金設立に向けた熱い思いをアピールしました。

一日目の講演としてフィリピン・農林銀行家アンドレス・G・パンガニバンさんによる「小規模金融における8つの魔法」というテーマで話がありました。貧困に苦しむ人々を対象にした小規模金融の果たす役割と可能性について学び活発な意見交換も行われました。

「互恵のためのアジア民衆基金」と設立に向けて

2日目は、論議する前にオリブオイルの産地であるパレスチナの置かれている厳しい状況を記録したビデオを視聴しました。人間としての尊厳も生きているパレスチナから、窮状を訴えるメッセージが届けられました。

次に、「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議の最も重要なテーマである、「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備委員会設立について提案があり、検討を行いました。

20年前のネグロス救済からはじまった連帯によって導かれた「互恵のためのアジア民衆基金」について基調報告・趣意書に沿って、①対角線的な関係のネット

ワーク形成②民衆による互恵的な金融事業構築のための基金設立について提起しました。海外からの参加者は、これを主体的に受け止めて、共有しました。

受けて、「受益者であるアジアの各団体が基金の設立や具体的な運営検討に参加したい」「金利・為替変動などについての不安」や「専門的な知識のある人の参加の必要」などが提起されました。海外からの参加者は、これについて今後準備する中で検討することになりました。

各国各団体にはさまざまな困難があります。その具体的な内容がそれぞれの団体から出されました。しかし、「基金」はあくまでも「金融」を基本とし「借りたものは返す」というシンプルなものとする、出された問題についてはそれぞれの団体の主体的な責任で乗り越える、ことを確認しました。例えば、パレスチナに必要な農道建設などの資金に関しては、別の援助の方法を提案していくことで合意しました。

設立に向けた準備委員会とその事務局の設立を確認し、委員を選出。今後、準備



海外からの参加団体

C (オルター・トレード社)
FI (オルター・トレード財団)
ンゴン生産者代表
RDEV (農村開発のための協同組合)
INA (オルター・トレード・インドネシア)
MD (パプア農村コミュニティ発展財団)
I ("泉湧き出で大河となる" 研究所)
カイル・アカデミー/アルカイル・ビジネスグループ
RC (パレスチナ農業復興委員会)
WC (パレスチナ農業開発委員会)

日本人・呼びかけ人団体・参加団体

	行岡 良治
グリーンコープ連合	吉田 文子
会	加藤 好一
同組合連合会	若森 資朗
	藤田 和芳
	宋 英淑
APLA	秋山 眞兄
・ジャパン	堀田 正彦
日本消費者連盟	富山 洋子
日本ファイバーリサイクル連盟	田邊 紀子

動などについての不安」や「専門的な知識のある人の参加の必要」などが提起されました。海外からの参加者は、これについて今後準備する中で検討することになりました。

各国各団体にはさまざまな困難があります。その具体的な内容がそれぞれの団体から出されました。しかし、「基金」はあくまでも「金融」を基本とし「借りたものは返す」というシンプルなものとする、出された問題についてはそれぞれの団体の主体的な責任で乗り越える、ことを確認しました。例えば、パレスチナに必要な農道建設などの資金に関しては、別の援助の方法を提案していくことで合意しました。

設立に向けた準備委員会とその事務局の設立を確認し、委員を選出。今後、準備

の商品が組合員に届けられるようすを視察しました。

「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備大会開催趣旨

私たちは、自然を破壊し、南の国々の人々から搾取・収奪し、地域を解体し、女たちを虐げてきましたが、特に地球温暖化の進行と世界恐慌の可能性、それによる戦争の可能性は今後、世界中の貧しくて弱い人々に最大の犠牲を強いようとするでしょう。私たちはこの現実を直視しつつ、この現実を変えるためには、自然と人、南と北、人と人、女と男の共生を求め、南の民衆と北の市民が連帯していくことしかないことを確信しています。

私たちはそうした立場から、20数年前、フィリピン・ネグロス島の民衆を飢餓から救うためのマスコバド糖やバナナの民衆交易から出発し、日本・韓国・フィリピン（ネグロス）、日本・韓国・パレスチナ、日本・インドネシア・東ティモール・パキスタンなど、南の民衆と北の市民の間に広範な民衆交易網を築いて来ました。しかし、それは残念ながら、日本や韓国を中心とした線状の関係にとどまり、フィリピンとパレスチナ・インドネシア・東ティモール・パキスタンなどの間の相互交流や連帯は非常に希薄でした。私たちは、この線状関係をネットワーク化して、南の民衆と北の市民の相互交流・連帯網に発展させなくてはならない。また、私たちの民衆交易網は、南の物産の手工業的な生産と、これの北との手工業的な交易活動にとどまっていますが、南の多様な可能性の芽を育み、私たちの民衆交易事業の総合的な成長・発展を実現していくためには、民衆による互恵的な金融事業の構築が求められていると考えています。

私たちはこの二点、アジア全域にまたがる市民・民衆ネットワークの形成、オルタナティブな市民・民衆金融事業、を実現していく契機として、「互恵のためのアジア民衆基金」を設立し、それをとおして、アジア的広がりにおける国際連帯と、アジアの自立のための金融という新しいツールを実現しようと考えます。

この新たな事業を開始するためには、私たちの思いだけではなく、何よりもアジアの民衆の意見・提案・計画・夢（希望）を共有し、共にそれを具体化していくことが不可欠です。そのために、今般、私たち（日本・韓国）がこれまで関係を築いてきたフィリピン、インドネシア、東ティモール、パキスタン、パレスチナの民衆組織・市民組織の代表を迎え、「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備のための国際会議「アジア民衆福岡寄り合い」を開催することにいたしました。

私たちの今回の一歩は小さな一歩にすぎませんが、この小さな一歩が、分断された世界を友情で結び、人間を真に解放していく第一歩になるものと確信しています。関係各位のご理解とご協力を心からお願いする次第です。以上

の中で、「互恵のためのアジア民衆基金」の原資については民衆交易品のパナナとエコシュリンプに上乗せすることが提起されています。この具体的な検討については、今後グリーンコープ共同理事会で行っていくこととなります。

国際会議を終えて

国際会議を終えて11月11日の報告集会までのひととき、各国からの参加者はフレッシュツアーで熊本県阿蘇の日本の美しい自然を堪能し、英気を養いました。その中でグリーンコープの熊本物流センターを訪問し、民衆交易品のネグロスバナナや東ティモールのロサエコーヒー、パレスチナのオリブオイルなどの商品が組合員に届けられるようすを視察しました。



ネグロスの共生・連帯 アジアの国々

「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備国際会議の報告

11月8日・9日に、6カ国と日本の7カ国の仲間が集まり、「互恵のためのアジア民衆基金」の設立準備のための「アジア民衆福岡寄り合い」、この基金を来年秋に正式に設立することで合意いたしました。

この設立準備の国際会議に集まりました7カ国の参加者を代表し、この国際会議のためにご尽力を頂いたグリーンコープの皆様に御礼を申し上げるとともに、「互恵のための民衆基金」を設立することになった経緯、基金の基本的理念、そしてそれについての具体的に協議し、確認したことをご報告します。

この基金を設立することになった背景の第1は、「民衆交易」の存在です。南の民衆と北の市民の連帯として、今から20年余り前、グリーンコープの皆さんとともに、フィリピン・ネグロス島の民衆を飢餓から救うためのマスコバド糖とバナナの民衆交易が開始されました。そして、それを基盤にして、インドネシアのエコシュリンプ、アフリカと南米のコーヒー、グランドの塩、パレスチナのオリーブオイル、東ティモールのコーヒーなど、南の民衆と北の市民の間に広範な民衆交易網を築いて来ることができました。

この20数年の間には、ベルリンの壁の崩壊、日本経済におけるバブル崩壊がありました。しかし、今、アメリカから始まった金融破綻は、アメリカに止まらず、世界を大恐慌に巻き込み始めています。この大恐慌は、まぎれもなくアメリカ国家・企業の強欲が生み出したものですが、それにもかかわらず、これによって最も苦しむのは南の国々の、そして北の国々の弱い者、貧しい者です。

この危機的事態から、苦しめられる人々を救うことが可能なのは、この20年余りの私たちの経験から、南の民衆と北の市民の連帯にほかならないと確信しています。

従って、私たちのこの経験を基盤にして、南の民衆と北の市民の連帯、特にアジア地域での連帯をより広範に、緊密に、そして深いものへと進めなくてはなりません。そのために、私たちは次の2つの目的を掲げました。

その第1は、これまでの民衆交易による連帯は日本と各生産国、韓国と各生産国との間の線としての関係でしたが、それを相互に網の目のように、市民と民衆ネットワークを形成し、南の民衆と北の市民の相互交流・連帯網に発展させることです。

第2は、特に農業を核とする第1次産業をはじめとして、南の多様な可能性の芽を育むこと、そして民衆交易事業の総合的な成長・発展を実現していくために、市民・民衆による互恵的な金融事業を構築することです。

この2つの目的を実現するために、私たちは「互恵のためのアジア民衆基金」の設立をしていくことを確認しました。

「互恵のためのアジア民衆基金」の基本理念の第1は、「南と北の共生」です。ここでいう「共生」の意味は、「南」が南の特徴、それは互いに助け合う人と人との関係など、「有機性」といえるものですが、それを放棄して「北」と同じようになることではありません。もしそうなったならば、世界全体が「北」の無機的な工業的な「貧しさ」に覆われ尽くされることになり、それは悲劇以外の何者でもありません。「南」は「南」自身を再発見し、「南」として自立しなくてはなりません。そして「北」は、そのような「南」に寄り添ってもらい、南が南として自立していくことを支援し、その結果として「北」も救われていくのだ、といわなくてはなりません。

基本理念の第2は、「生命の尊重でなければならない」ということです。民衆交易運動の原点は女性と子どもの尊重、言い換えれば、生命の尊重であるという事実を決して忘れてはなりません。そうした民衆交易運動を基礎に新設される「互恵のためのアジア民衆基金」の原点もまた、女性と子どもの尊重、生命の尊重でなければなりません。

私たちは、この2つの基本理念を確認いたしました。

この基金には、主な資金提供者となる日韓の組織だけではなく、その資金を活用する国々の組織も参加して、民主的に運営する相互扶助の事業であることを確認しました。この基金は今後、各国の農民を始めとする民衆にとって、経済的社会的状況の改善に有用なものとなるということで意見が一致しました。

また、南の国の現状においては、融資を活用できる事業とはなり得ない課題が多くあります。しかし、基金の資金は限られたものであり、また持続していくことが南と北の連帯にとって不可欠なことです。融資ではない資金供与や、問題・課題に対する情報・技術・知恵の分かち合いについては、基金とは別の形で、例えばAPLAなど、このネットワークの協力関係を用いて行うことが可能であると思います。従って、基金の資金は融資事業として用いることで合意いたしました。

「互恵のためのアジア民衆基金」は、政治的にも経済的にも、また環境的にも激動と崩壊のきざしに直面している現在の世界、その荒波を乗り切るにはとても小さな船でしかないかもしれません。しかし、南の民衆と北の市民との連帯こそが、その荒波を乗り越えられようという「希望の船」でもありますし、皆様と一緒に希望の船にしていかななくてはなりません。どうか、今後とも「互恵のためのアジア民衆基金」へのご支援、ご協力を重ねてお願いいたしまして、この報告を終わらせていただきます。

(途中、省略している部分があります)

フィリピン



ノルマ・ムガルさん エドウィン・ロペスさん



グレゴリオ・ラシガンさん サンチャゴ・ルセロさん

インドネシア



ハリー・ユリ・スサントさん デッキー・ルマロベンさん

東ティモール



ダニエル・ペレイラさん アンテロ・ベステ・タシルバさん

パキスタン



ムハマド・ムザヒル・シェイクさん アブドゥル・カユムさん

パレスチナ



カリード・ヒドゥミさん サリム・アブー・ガザレーさん



フィリピン	AT AT バラ CO YP
インドネシア	AT YP
東ティモール	KS
パキスタン	AL
パレスチナ	PA UA

設立発起人

呼びかけ人
生活協同組合連合会
生活クラブ生協連合会
パルシステム生活協同
大地を守る会
ドゥレ生協連合会
特定非営利活動法人
(株)オルター・トレード
特定非営利活動法人
参加団体
特定非営利活動法人

11月12日から13日にかけ、実施されたグリーンコープの各単協での分散交流会については、次号で紹介いたします。

11月12日から13日にかけ、実施されたグリーンコープの各単協での分散交流会については、次号で紹介いたします。

セーフティネット貸付の実現に向けて



主催 セーフティネット貸付実現全国会議

北九州シンポジウム

セーフティネット貸付
実現全国会議主催

10月11日(土)、北九州市で「セーフティネット貸付の実現に向けて」北九州シンポジウムが開催されました。多重債務者などの救済にセーフティネット貸付を実施しているグリーンコープや民間金融機関の報告がありました。また、パネルディスカッションでは、現在のセーフティネット貸付の問題点やグリーンコープなど民間団体と行政の日常的なネットワークの必要性が意見交換されました。集会には181人の参加があり、関心の高さが窺えました。

生活の再生をめざして

多重債務問題が社会問題として大きく取りざたされる中で、2009年には改正貸金業法が完全施行されます。貸金業法の改正では、貸金業者の過剰貸付に対する制約が設けられました。伴って貸金業者は利用者を選別するようになり、融資を断られる多重債務者が、無登録のヤミ金融業者に走る可能性がでてきます。そうした状況に陥らないために、セーフティネット

ト貸付の整備が急がれます。

国は、生協など非営利機関、労金など民間金融機関、社会福祉協議会など公的機関を担い手としています。しかし、現状は全国のごく一部の団体・機関が取り組みをはじめているに過ぎません。そうした状況から、弁護士、司法書士、市民などが参加して「セーフティネット貸付実現全国会議」が立ち上がり、地域でのセーフティネット貸付の幅広い実現に向けて活動をはじめました。

パネルディスカッション

地域における
セーフティネット
貸付実現に向けて

大胆に仕組みづくりをする

千田透さん(厚生労働省地域福祉課課長補佐)
グリーンコープなど生協が相互扶助という視点で貸付事業ができるように、積極的に取り組んできた。国の施策としてのセーフティネット貸付としては、「生活福祉資金貸付」がある。他にも平成20年度は、生活保護に至らないようにするための早期支援等も予算化されている。

勝野耕太郎さん(福岡県社会福祉協議会生活福祉資金部部長)
福岡県では、「生活福祉資金貸付」は、民生委員の相談を経て、市町村の社協が窓口になって受け付ける。低所得世帯、高齢者世帯、障がい者世帯の経済的自立や安定した生活を送れるように支援している。現在の貸付状況は、修学資金(無利子貸付)が過半数以上で他に更正資金、離職者支援基金など。償還率が低く57.6%(2007年度)、連帯保証人の必要など貸付条件の厳しさを手続の煩雑さ、審査期間が長いことなどが課題としてあげられている。また、一般的に周知されていないという問題点もある。

高崎尚彦さん(福岡県新生活推進部生活安全課消費生活センター企画主幹)
福岡県は、国の多重債務問題改善プログラムの策定を受けて積極的に取り組むこととしたが、ノウハウがないことから、生活再生相談事業を行っているグリーンコープとの連携を考えた。厚生労働省とも相談をし、生協法が改正されグリーンコープとの協働事業に踏み込んだ。協働事業とは単に事業を委託するというのではなく、それぞれの持つノウハウや資源を持ち寄り、協働して多重債務者問

題の解決にあたるということ。このことで広く県民に活用できるセーフティネット貸付の仕組みをつくることができた。

人としての尊厳を大切にしながら、きめ細やかに
行岡みち子さん(グリーンコープ生協ふくおか生活再生相談室室長)
善意と相互扶助の精神で、生活の再生を重点として取り組んでいる。社会的なセーフティネットの広がりはまだ不十分。特に多重債務に陥らないための予防として、消費者教育や金銭教育が必要。多重債務に陥っている人のための相談の

入りが不足している。また、債務整理後の生活再生に向けた家計診断、カウンセリング相談、急に生じる生活資金の不足に対する経済的サポートはほとんどなされていない。そうした状況に対して、グリーンコープでは生協の仕組みを活用し、生活再生事業として「金銭教育事業」「消費生活支援事業」「生活再生相談事業」「生活再生貸付事業」の4つを立ち上げた。各事業が機能しあって、多重債務の予防と今後のサポートをしている。生協法の改正と福岡県との協働事業により、生活再生貸付が組合員外も利用できるように

なった。また、県内の事業所も4カ所に広がり充実している。今後も県民に喜んでもらえる事業の継続に向けて国や県のサポートが必要だ。

課題を克服しながら

連帯保証は世界的に見るとまれなことで、機関としての保障制度の必要や、グリーンコープのように単一の団体でリスクを負うことなどについて意見交換されました。

セーフティネット貸付実現全国会議では各地域でのシンポジウムを重ねながら問題の解決を図り、セーフティネット貸付を広げていく努力がされています。

九州での取り組み

九州ろうきんとグリーンコープの4つの生活再生相談室(グリーンコープ生協ふくおか・グリーンコープ生協くまもと・グリーンコープ生協おいた・グリーンコープやまぐち生協)から「地域におけるセーフティネット貸付の状況」の報告がありました。

グリーンコープ

丸山恵子さん

(ふくおか相談室次長)
グリーンコープの貸付事業(セーフティネット貸付)は相談者の生活の再生を支援することを最大の目的にしています。家計の現状を家計簿で把握し、返済計画を含めた生活設計をし、相談者といっしょに生活の再生に取り組みんでいます。現在福岡県内には、2006年に開設した福岡相談室、2008年4月から福岡県との協働事業となり、同年



講演するふくおか相談室次長 丸山恵子さん

5月に開設した北九州・直方・久留米の各相談室、計4カ所の相談室があります。2006年8月〜2008年9月の貸付の実行件数は170件(1億5469万円)、協働事業となつてから相談件数も約3倍に増えていきます。相談件数の激増で対応に苦慮していま

すが、相談員のスキルを上げながら、いっそういい対応を心がけていきます。

九州ろうきん

不動吉則さん

(九州労働金庫営業推進部長)
多重債務対策本部を設置し弁護士や司法書士とのネットワーク、多重債務者相談マニュアルの作成、「生活改善ローン」の商品化に取り組みしました。生活の設計・改善・防衛としての多重債務対策です。労働組合の組合員や学生等を対象にした多重債務やマネートラブルなどの研修会も数多く取り組んでいます。2007年度の負債整理資金融資は134件、約5億5千万円。相談者は労働組合の組合員です。今後は、パートや派遣など未組織労働者に対するいい対応が課題です。

岡部信雄さん

(おいた相談室長)
8月に開業し、実績はまだ1ヵ月。電話での問い合わせは55件、内組合員は61.8%、女性76.4%です。「グリーンコープの組合員から聞いた」など組合員からの口コミのようすが伺えます。

渡辺進さん

(やまぐち相談室長)
開業は9月22日。この5日間は、電話件数が7件全

た。また、県内の事業所も4カ所に広がり充実している。今後も県民に喜んでもらえる事業の継続に向けて国や県のサポートが必要だ。

グリーンコープ生協（長崎）
20周年記念講演会

講師 落合 恵子さん

作家・東京家政大学特任教授（人権、教育、家族論を中心に講義）。

執筆業と並行して、子どもの本の専門店クレヨンハウス、女性の本の専門店ミズ・クレヨンハウス、有機食材の店「野菜市場」、オーガニックレストランなどを主宰。子育て雑誌「月刊クーヨン」発行人



「人と地球にやさしいアクション」をキーワードに、グリーンコープ20周年キャンペーンが展開されています。その一環として、グリーンコープ生協（長崎）主催の記念講演会が10月30日、長崎市で開かれました。講師は、「書くだけでなく、行動する作家」として活躍中の落合恵子さん。「息苦しい閉塞の時代を拓こう」という講師のメッセージに、20歳代から80歳代まで参加者309人、満員の会場が沸き返りました。講演の要旨を紹介します。

いのちの感受性



人の権利と書いて「人権」。人権は私のテーマの一つです。私は人権を「誰の足も踏まないこと、誰にも自分の足を踏ませないこと」と言い換えることがあります。こういった感覚を持つに至った理由の一つに私の出生がかかわっています。

1945年1月、22歳の時母は一人で私を生みました。15歳になった生意気盛りの私、母にたずねたことがあります。「なぜ私を生んだの？」。母はこう言いました。「お母さんはあなたのことが欲しくて欲しくてしょうがなかった。だからあなたを生んだの」。

豊かな人権感覚を持てた子どもは幸せ。ただある意味傷つきやすくなり、また、なせなら世の中は差別だらけ、あれもこれもと気づいてしまうことは、傷つくことでもあるから。障がい者への差別、被差別部落の人への差別、そして性差別。本当に傷つかないといかないのは差別する側であり、差別こそ恥ずかしいことです。「原爆投下は仕方なかった」「女は子産みの道具」「アルツハイマーでも分かる」など、これらの言葉は単なる言葉でしかありませんが、言葉はその人の思想を映します。

「ないなら作ろう」

私たちはある意味忘れやすい人生を送っています。忘れないうちに生きていけないこともあります。でも忘れてはいけないうちにもあります。例えば「長崎」であり「広島」です。それは戦争

を起こした、経験した人間の義務であり、権利です。平和はちよつと忘れられると壊れてしまうもの。私たちはどのように戦争に巻き込まれていったのでしょうか。35年前、オーストラリアの普通の女性たちが作った歌があります。自分たちの歌いたい歌、「ないなら作ろう」という一つの行動提案を紹介しよう。父親、夫そして息子の3代にわたって愛する人を戦場に送った母親に贈ります。「耐えること、従順であること、素直であること、受け身であること、それが女の人生のすべてである」と貴女は教えられてきた。そんな母に、大人になった娘は、ずっと言いたかった言葉を送るのです。「お母さん大好き。でも私は貴女と同じ生き方をしたくない。愛する人が戦争に送られるのは嫌。誰かの足が踏まれているのを見たら、その足がどんなに大きくても、「その足どけなさい」。そう言える自分になります」と歌いました。作詞作曲からレコーディングまで、全部自分でやっていこう、すべて自分たちでやろうと言いました。

40歳代になって、どうも体の調子が悪くなりました。「病院で処方されるたくさん薬、体にいいはずがない。いろいろ調べてみてもやっぱりおかしい。そうだし食から変えていこう」と決心しました。当時はまだ手に入れるのは難しかったけれど、有機栽培のものを食べ続けること1年半。久しぶりに体が息してるって感覚、爽快感が戻ってきました。あれほど執拗だったアトピーがなくなったのです。また、体にいい食材は、第一においしいですね。やり出した止まらない食の世界。このおいしさを子どもたちと共有したいと思いましたが、レストランや八百屋をはじめたのもこのため。分からないことは一つひとつ周りに、社会に教えてもらいました。そうやって積み重ねて今があります。「そのお返しをしなくて」と、走って走って息を切らしていた時、母が倒れました。あるいはこれも、贈り物だったのかもかもしれません。

「いのちからすべてを変えていきたい」

昨年夏、母は亡くなりました。在宅で介護をして約7年。いつ自分が死ぬか、そう思う程、精神的にも肉体的にも追い詰められたこともありました。でも、もう少しやれた、今そう思えます。

母を介護していた時、米国によるアフガニスタンへの侵攻があり、イラク戦争もはじまりました。その時思うように動けなかった私ですが、確かにもう一つの景色が見えていました。一人の人のいのちに、深く深く深くかかわることは、海の向こうのいのちとどこかにつながることなのか、と実感しています。最後に、こんなふうに子どもや友だち、お年寄りとかかわりたい、そんな心を込めて、一つの歌をみなさんと共有したいと思っています。60年代から現在も活躍するシンガーソングライター、キャロル・キングの「You've got a friend」。「ここにあなたの友だちがいるよ。ここにあなたの仲間がいるよ。これは、まさにグリーンコープのみなさんだと思います。できる限り自立をして生きる、でもどうしてもない時、「助けて！」と言いたい関係になる。そんな間いかけをしてくれます。一つひとつのいのちが自分色に輝ける、そんな時代や社会をめざして大切な一人ひとりの私たちにできることをやり続けることです。柔らかに手をつなぎながら。

食の話を少し

グリーンコープもそうしてできたのだと思います。平和について、ここにも新しい一つの扉が開けます。

安心・安全な豚肉を安定して食べ続けるために 産直豚肉の価格を改定しました

グリーンコープはこれまで、安心・安全な食べものを組合員に供給するため、生産者と産直関係を結び、安定して生産、消費できるシステムをつくってきました。

しかし、この間の飼料や燃料費の高騰などで、畜産農家の経営は非常に苦しくなっています。このままでは産直豚の安定供給を続けることができない可能性も出てきました。

生産の「安定」がなければ、食の「安心・安全」は成り立ちません。そこで、これまでの産直生産者との価格設定の方法を見直し、安定した供給、需要ができるように、今年9月から豚肉の価格を改定しています。

世界的な食糧不足が飼料高騰をもたらす

食料（特に穀物）不足が世界全体を覆っています。その原因は主に、中国やインドなど新興国での食生活の変化による食糧需要の増加、バイオ燃料向け原料の需要増、地球規模の気候変動の影響の三つで、しかもこの現象は一時的なものではなく、恒常化する可能性が高いとも言われています。日本は海外から安い飼料を調達して畜産業を進展させてきました。豚肉の主な飼料であるトウモロコシはほぼ100%を輸入に頼っています。しかし現在、多

くの穀物輸出国は自国民の食料確保を優先するため、輸出規制をしています。それによって飼料代は高騰、おりからの燃料費の値上げも拍車をかけ、養豚におけるコストは加速的に跳ね上がり、経営を大きく圧迫しています。このような状況により将来の利益が見込めない中、廃業する生産者も続出しています。かつてない不況が養豚業界を襲っています。

産直豚肉生産者の現状

グリーンコープの産直豚肉に与える飼料は non-GMO（遺伝子組み換えでない）で、かつトウモロコシは PHF（ポストハーベストフリー）です。また、豚はストレスにより肉質が低下しやすいため、開放型の豚舎でのびのびと、通常よりも時間をかけて育てます。こうして安心・安全、しかもおいしい豚肉が組合員に届けられています。

しかし昨年から飼料作物の高騰によって3ヵ月ごとにエサ代が跳ね上がったという状態が続いています。また、鉄骨などの高騰で設備の投資、豚舎のメンテナンスなどの諸費用も増大しています。グリーンコープの生産者グループのひとつ「綾豚会」では廃業した畜産農家もいます。

時代に即した価格設定の基準の見直し

グリーンコープでは産直豚肉生産者が安定して生産を続けていけるよう、豚肉の価格設定の基準を次のように見直しました。

比べ、設備の設置とメンテナンス、燃料費は1頭あたり2,500円増加していると言われています。それに伴う値上げ率は6・42%となります。

グリーンコープの引き取り率を上げます。生産者はすべての豚肉をグリーンコープに出荷できるように、グリーンコープの基準で飼育しています。しかしその引き取り率は約80%で、引き取らなかった分は一般市場に出荷されています。一般飼料と non-GMO 飼料との価格差は生産者負担となっています。

グリーンコープ仕様の産直豚肉はグリーンコープ内での利用拡大をめざします。以上のような理由により、産直豚肉の価格を、今年9月から10・46%値上げしました。グリーンコープはこれまでも加工用トマト生産者など国産原料の生産者を支援するために、生産奨励金などとして商品価格に上乗せして集めたお金を届けています。産直関係にある豚肉の生産者へは安定的な生産



母豚のおっぱいを飲む、生まれて3日目の赤ちゃん豚

畜産飼料の国産化に向けて

日本は畜産飼料のほとんどを外国産穀物に依存しています。そのような日本の畜産のあり方そのものを変えていく必要があります。

現在グリーンコープでは、畜産飼料の国産化に向けて動き出しています。すでに母鶏の飼料に配合している穀物に米や大豆などの国産穀物を使用する「国産穀物を使った産直たまご」を企画しています。さらに養豚においても、取引先メーカーの製造過程で出る端材（パンや野菜のくずなど）を飼料として活かすなど、グリーンコープの中で循環させるシステムづくりの模索がはじまっています。

市民の生活も厳しくなる中、値上げに踏み切ることには大変な決断でした。しかし私たち一人ひとりが産直豚肉を食べ続けることで、豚肉生産者が安定して生産を続けられることになり、ひいては日本の農畜産業を応援することにもなるのです。



生産者グループの一つ「紅会」の中村さん一家で養豚を営んでいる



non-GMOの飼料
トウモロコシはポストハーベストフリー

豚肉の価格改定の内訳

現行枝肉価格	545円/kg	
改定後枝肉価格	602円/kg (+10.46%)	
枝肉価格改定項目	飼料価格の変動を直近の飼料価格とする	2007年10月～2008年3月期の飼料価格は55,111円/トン 2008年4月～6月期の飼料価格は60,075円/トン
	飼料要求率の改定	飼料要求率3.5→4.2 2000年に遡って値上げ額を再計算
	その他費用高騰分	設備の設置とメンテナンス費、燃料費等の高騰分

産直豚肉のこだわり、おいしさを知ろう

グリーンコープ生協おおさか 産直豚肉講習会



▲豚肉の部位について説明するパッカーの梶永さん(左)と平井さん。「焼く時間は強火で片面40秒ずつ。焼きすぎないこと」など、**豚**豚コースソテー(冷蔵)のおいしい焼き方が実演されました

豚の飼育法について遠藤さんから話がありました。「確かなものを作りたい」とグリーンコープの厳しい飼育基準を守りながら豚を育てている「自然のものを自然に育てる大切さを長年の経験で実感し、豚に日光浴をさせるなど、ストレスを与えない自然な飼育法を実践している」「飼料は遺伝子組み換えでないとうもろこし・大豆、大麦などの穀物飼

料を使用している。中でも大豆、大麦が脂身の旨みを作り出している。今後は外国産飼料に頼らない飼料給餌も考えている」などの話がありました。また、綾豚会の豚6頭が2008年度宮崎県畜産共進会にてグランドチャンピオンに輝いたという最新の嬉しいニュースが紹介されました。「組合員みなさんはチャンピオンの豚肉を食べてるんですよ」との言葉に、参加者からは喜びと驚きの声がありました。

10月30日、設立3年目のおおさかで産直豚肉講習会が開かれました。グリーンコープのこだわりある産直豚肉の理解と利用を広めることが目的です。
産直豚生産グループの綾豚会理事遠藤威宣さんとパッカーのイサミ(株)梶永徹さんを講師に、豚の飼育や肉のバック詰め過程などについて学びました。参加組合員28人、有意義な時間を共有することができました。



▶綾豚会の遠藤さん(左から2人目)を囲んで試食会。会話ははずむ

梶永さんからは、「**産直豚**コーススライス(冷蔵)が枝肉からバック詰めされるまで」がスライドを使って説明がありました。全工程で、衛生面・安全面について徹底されていることが分かりました。工場見学しながらの臨場感あふれる解説に参加者は熱心に聞き入っていました。一般業者は肉の部位(コースやモモなど)ごと

に仕入れますが、グリーンコープの場合は生産者から一頭まるごと買い取ります。「組合員の注文に応じてバック作業を行うが、豚一頭から取れる肉の部位の量は決まっている。利用が少ない部位は余り、冷凍在庫になってしまふ」とのこと。豚一頭を食べるためにいろいろな部位を満遍なく利用してほしいとお願ひも出されました。

参加者からは「産直豚肉の安心・安全がよく分かった。子どものためにも利用したい」「今まで食べたことがなかったが、とてもおいしい」「安全な豚肉を作りたい」「安全な豚肉を作りたい」「安全な豚肉を作りたい」などの感想があり、産直豚肉について理解や興味を深めた講習会になりました。

中国産原料の検査状況のご報告と、水産加工品の立ち入り調査状況のご報告

■中国産原料の検査報告の補足とお詫ひ

中国産原料の検査状況について、共生の時代号外第243号(2008年2月25日発行)・第254号(2008年10月13日発行)でご報告しました。

号外第243号の中で、「グリーンコープが組合員のみなさんに供給している商品で中国で製品化されているものは、春雨の2商品(「中国産緑豆春雨」・検査済み問題なし「プチはるさめ」)今後検査一だけです」と報告していました。「プチはるさめ」については、300項目の残留農薬などの検査を行い、「問題なし(不検出)」となっています。

■水産加工品の立ち入り調査状況について

グリーンコープは、今年8月に明らかになった「日本海産あんこう鍋(スープ付)」のアンコウが中国産であったことを受けて、水産加工品(369アイテム・87工場)に関する立ち入り調査を行う、としていました。10月末現在、333アイテム・77工場の検査が終了、対象商品について問題がないことを確認しました。残りの36アイテム・10工場について、現在検査をすすめているところです。今後、引き続き中国産原料の検査・水産加工品の立ち入り調査を行い、結果については、本紙で報告していきます。

グリーンコープがめざす

生活協同組合



グリーンコープ連合の誕生2

「グリーンコープの究極の希いは地球上のすべての「いのち・自然・くらし」を守ることにあります。この希いを地域の運動として表現していきます」というグリーンコープ宣言は、1988年グリーンコープ連合設立総会で採択されました。

そこには人類の誕生と進化から社会の誕生へと語られ、その社会が平和であるために必要な「4つの共生(人と人との共生・自然と人との共生・南と北との共生・女と男との共生)」が謳われています。起草は初代会長故武田桂二朗さん。彼の卓越した先駆性に、グリーンコープの運動と事業は、導かれてきたとも言えます。その端的なものがグリーンコープ宣言です。

高い志と希いを掲げ、誕生したグリーンコープ連合ですが、その設立は大きな課題を抱えるというところでもありました。生

い立ちの異なる「ちくれん」と「共生社」が相互に理解しあうという難題。二つの組織が一つになって生み出す「規模」。それを生かす人の主体性。組合員から「生協が遠くなった」と表現された、商品の仕入れ・開発・企画の連合への移管。それは、単協にとって生命を奪われるに似た「主権」の一部を失うことでもありました。それらの課題を一つひとつ乗り越えるために、グリーンコープ宣言は根本的な思想として、基本的な方向を示しました。どんな事柄も解決のための葛藤は筆舌に尽くしがたい痛みを伴いましたが、その痛みは、グリーンコープとそこに集う人々の血肉となり、他に得がたい資質を育てていきました。そして、その資質が、誕生時14万人であった組合員が20年後の今日、40万人になるという飛躍をもたらしたのです。

(お詫びと訂正) 本紙11月号7面「日本の生協運動のはじまりと発展」の中で誤りがありましたので、訂正してお詫びします。(誤)不可避→(正)不可分

投稿募集中

- グリーンコープ誕生20年よせて
- 私の好きなグリーンコープ商品

●400字程度 ●月切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワークス連(RCN)「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

2008年10月の組合員数400853人(10/27現在)

リユース リサイクル データ 2008年9月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モウルドバック
回収本数 947,574本 回収率 99.8% (8月17日～9月13日回収分)	今月のデータ掲載はありません	回収重量 14,829kg 回収率 60.8%	回収重量 39,070kg 回収率 114.4%

放射能汚染測定結果報告(181) 2008年9月

放射能汚染食品測定室検査。
NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※	さつま芋	宮崎県	ND	ND	ND
	鶏飼料		ND	ND	ND
※	スパゲティ	国内産	ND	ND	ND
※	オリーブ油	ギリシャ	ND	ND	ND

グリーンコープ

組合員
ワークス
職員
リレーメッセージ

未来へつなぐ20年 私の思い

グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの
人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つ
とつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープ
の成熟へとつながってきています。この一年間、さま
ざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもと
ていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワ
ークス・職員からのリレーメッセージを掲載します。



グリーンコープ生協おいた元理事長 家室 まり

グリーンコープと出会い、せっけん運動に夢中でした

息子が生まれて家事に目覚
めた私は主婦湿疹に、息子は
沐浴剤にかぶれ、大変でした。
そんな時、グリーンコープ(当
時はナチュラルコープ)と出
会いました。グリーンコープ
は「せっけん派生協」です。か
ら、私もすべての洗浄剤をせっ
けんに切り替えると、親子共
々完治。生活のほとんどをグ
リーンコープで暮らすようにな
りました。わが家の暮らしに
グリーンコープはなくてはな
らない存在となりました。

その後、いろんなことをも
と知りたいとも思うようにな
り、子どもの成長に合わせて
空き時間に組合員活動に参加
しました。最初にかかわった
のは組織委員会です。その頃
おいたには、まだ地区委員
会がなかったで、他県での
組合活動経験者が「地区委員
会をつくってほしい」と当時
の事務に言ったところ、「あな
たがつくるのです!」。その
人と同じ委員会だったことが
きっかけで、地区委員会づく
りに奔走しました。「地区委
員会がないと伝わらない!」

という熱き言葉に共鳴し、訳
の分からぬまま、地域の組合
員さんに「わが家でせっけん
を手づくりしながらいろんな
こと、話ませんか?」とチ
ラシで呼びかけたりしまし
た。あの当時は委員会活動と
地区委員を兼任しながら、さ
まざまなことに取り組んでい
ました。

単協の組織委員長を受けて
からは、「ネグロス」「平和」
「せっけん」など運動テーマ
をいかに分かりやすく組合員
さんに伝えるかを考えること
に夢中だったと思います。協
同組合せっけん運動連絡会の
全国集会に参加させて頂いた
時、「せっけんはおばさんの
運動だから広げられない!」を
聞き、大変ショックを受けま
した。日常生活の中の「せっ
けんライフ」を伝えるため
に、せっけんの出前学習を考
えました。語り口や備品の充
実、実践の工夫などで誰もが
語れるような取り組みにつく
り上げるまで5、6年もの月
日がかかってしまいました。
あれもこれも、どの取り組み
も、みんな「あーでもない、こ
うでもない」とやっていたの
が懐かしう思い出されます。
当時赤ちゃんだった息子も
今では家庭を持ち、「赤ちゃん
すくすく個配」を利用して
います。

私はグリーンコープの前身
生協(現グリーンコープ生協
ふくおか)に1982年に加
入し、支部委員なども経験し
ました。組合員になったきつ
かけは、私自身が「アース(明
日)を守る会」という環境保
護の市民グループの代表とし
て熱帯雨林保護や、身近な自
然環境保護の活動などをやっ
ていて、「みどりの地球をみ
どりのままで」というグリー
ンコープのモットーにとても
共感したからでした。

「ふくし情報でんわ福岡」
は1995年4月にスタート
しました。私はその準備段階
から参加しており、引き続き
相談員になったので「ふくし
情報でんわ福岡」にかかわっ
て、今年で15年になります。

ハートのあるきめ細やかな応対を
こころがけてふくし情報でんわ福岡
責任者 望田 敬子

「ふくし情報でんわ福岡」
は、組合員からの電話による
さまざまな相談を受けて、そ
の問題の解決に役立つ適切
な情報を提供するというのが、
主な仕事です。相談の内容
は、子育て、福祉用品、介
護など多岐にわたっています
が、近年は介護の相談が増え
てきました。時には、心や身
体の問題についての相談も寄
せられ、対応に苦心すること
もあります。相談件数は、年
間3000件にもなります
が、どの相談に対しても私が
心がけていることがあります。
それは、対面ではなく電話で
の相談ということから、電話
の声を通じて伝わってくる相
手の思いをできる限りくみ取
るようにすることです。

組合員さんが「ふくし情報で
んわ」に期待するのは、通り
一遍のお役所的対応ではな
く、相手の立場に立った温か
な受け答えです。大事なこ
は、電話を通して私たちの
「ハート」を伝えることがで
きるかどうかです。もちろ
ん、それはなかなか難しいこ
とですが、グリーンコープの
「ふくし情報でんわ」に携わ
る者として、これからもずつ
と心がけていきたいと思っ
ています。

もともと「コープ」には「た
すけあい」という意味が含ま
れています。一人の組合員と
して、「ふくし情報でんわ」
を通じて、この「たすけあい」
の輪に参加することができれ
ばと願っています。

学生の頃、「食と農」をテーマに
したイベントを企画したことがあ
り、「無農薬で野菜をつくるとる人
たちがいるけど、会ってみんな」と
紹介を受けて、初めて野菜の生産者
にお会いしました。意気投合して開
催した青空市場は大盛況。無農薬で
野菜をつくる生産者と、安全を求め
る地域の消費者が
直接結びついてい
くダイナミズムに
感動して、気がつ
けばグリーンコー
プの前身生協のひ
とつ・長崎県南生
協の職員として働
いていました。

グリーンコープ生協おかやま
専務理事 水嶋 康彦人と人との出会いと
つながりを大切に

理想は高かったのですが、日々は
とても大変。カタログづくりから印
刷、受発注、仕分け、配達、集金と、
当時はすべてが手作業。朝早くから
深夜まで目の回るような忙しさで、
その割には生協も私も貧乏でした。
ただひたすらに若さと、生産者と組
合員を結んでいるという自負を支え

人も、違いはあっても、違うことを
お互いに理解できれば一緒にやれる
こと、そのためには相互理解を求め
て努力が必要なこと、「コトバ」は
とても大切なこと、たくさんこの
とをグリーンコープの成長と共に学
ばせてもらいました。
その後、縁あって岡山県でグリー
ンコープ生協をつくらうと立ち上

がった方たちと共に過ごすことにな
りました。たくさんの方の期待の中でグ
リーンコープの連帯に支えられなが
ら設立運動はすすめられました。設
立発起人が一言一句にこだわりなが
ら設立趣意書を綴り、2500人を
超える署名を集めて、熱気とパワ
ーと感動の中で2003年6月30日、
グリーンコープ生
協おかやまは誕生
しました。
それから5年、
まだまだ奮闘の日
々が続いています。
す。グリーンコー
プ設立20周年の今
年度、組合員人数6000人になろ
うとしています。今後とも時代や社
会状況がどのように変化しても、変
わりないグリーンコープであり続け
ることができるよう、「人と人との
出会いとつながり」を大切にしま
がら、共に歩んでいきたいと思っ
ています。